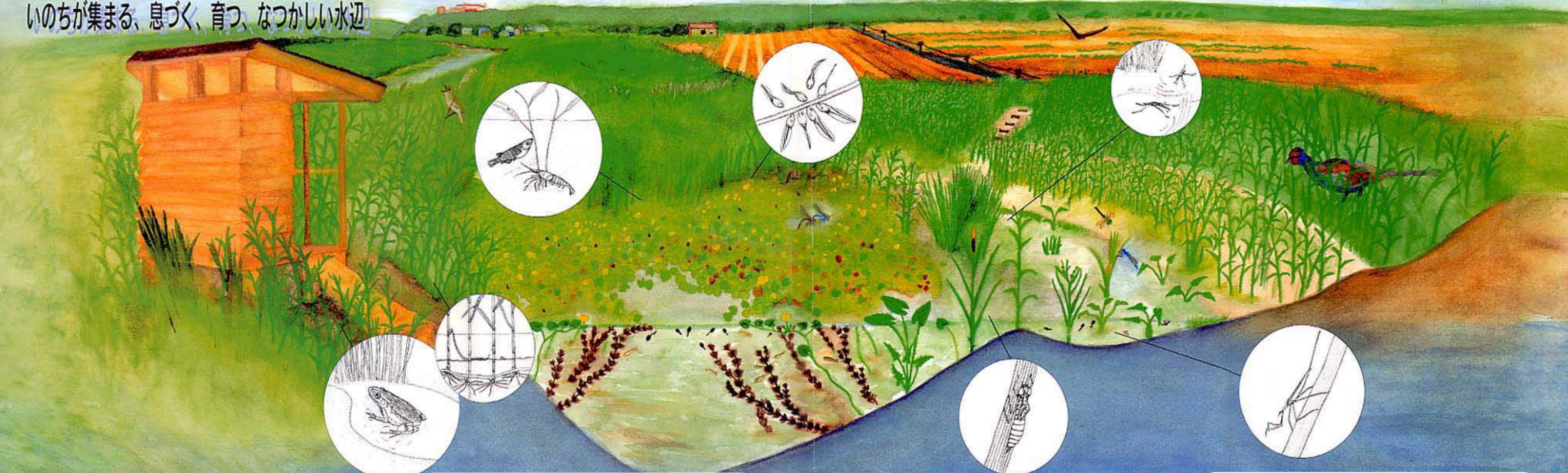


いのちが集まる、息づく、育つ、なつかしい水辺



河北潟本来の環境要素を再現する
河北潟地域は、広大な潟とともに、周辺のフゴとよばれる窪地状の湿地や、四方に張り巡らされた水路、大雨が降ると水浸しになる水田など、周辺に多様な湿地を擁していました。干拓地水辺ビオトープは、もともと潟があった場所にこのような湿地を復元したものです。また河北潟の湖岸線は現在のような直線的なものではなく複雑な形をしていました。干拓地水辺ビオトープは様々な水辺環境をできるだけ取り入れると同時に、湖岸の湾状にくぼんだ場所を意識して設計しました。

藁掘りにより自然の水辺植生構造を創出
干拓地はもともと水底で、少し掘ると非常に厚い不透水性の粘土層に至ります。この水辺ビオトープは粘土層にまで掘り下げることにより、ゴムシートなどの人工的な漏水防止の措置をとることなく、安定した水辺を創出することができました。このことにより、抽水植物～浮葉植物～沈水植物といった移行を伴った、自然状態に近い豊かな水辺植生が再現できました。また、粘土層と透水層の間から濾過水が供給されるため、表流水の影響が軽減され水質の安定も期待されます。

すり鉢状構造と池外縁にそった散策路により周辺からの影響を軽減
元の水底まで深く掘ったことにより、すり鉢状構造ができました。この構造のため、水面は周囲からは見えにくくなっています。また、池までの斜面が緩衝帯として機能し、農耕地や道路からの影響を軽減しています。観察舎までの小道は池の外縁のみを通すこととし、池へのかく乱を避けています。この小道は池をほぼ半周するコースとして、反対側はヨシ原により中央排水路のヨシ帯と連結させ、水辺ビオトープの孤立を避けています。

本来の植生を再現
この水辺ビオトープの造成に先立ち、河北潟に現在残っている水生植物の調査を実施しました。河北潟の湖岸植生の現状を把握するとともに、河北潟の本来の植生についての分析をおこないました。そうした調査、分析の上で、植生の遷移を想定した復元計画をたてました。また、池を造成した際に出た表土を有効に使いました。この表土中に埋もれていた種子が発芽し、自然の遷移により湖岸植生が再生しました。